シリーズ
かほく市の文化財 No.51

有形文化財 編　七塚の手押し式ポンプ

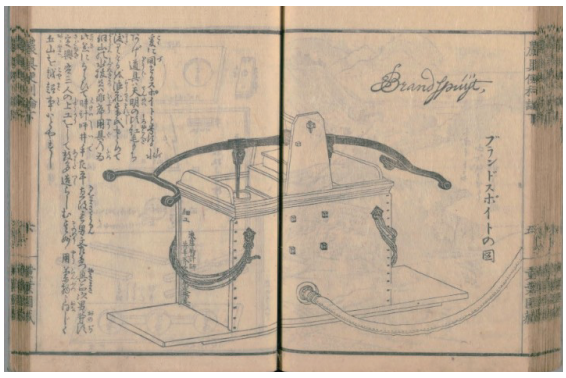
今回は、七塚で使われた消火機器である手押し式ポンプについて紹介します。

そもそも消火機器の歴史をみると、日本に手押し式ポンプの形態が登場するのは、龍吐水や雲龍水などが始まりで、江戸時代後期から明治頃にかけて製造・使用されました。基本的に大型の木箱の上に手押しポンプが付くような形をしています。ほかにも文政5年（1822）の『農具便利論』にも「ブランドスポイト」として、天明年間頃（1781～1789）にオランダから輸入され、浪花の時計師の井出家3名が細工した手押し式ポンプが紹介されています。これらは手押し式ポンプとして大型のものですが、小型のものも時代が進むとともに開発されたものとみられます。

七塚の手押し式ポンプは、旧七塚町に寄贈された小型のポンプで、七塚のいつ・どこで使われていたものかは正確には分かっていません。観察すると、主に消火器のような使われ方をしたものとみられ、水桶につけ、ポンプを手動で上下させて放水し使用するものとみられます。

毎年1月26日は、昭和24年（1949）1月26日に現存最古の木造建造物の法隆寺の火災に伴い、「文化財防火デー」として26日の前後あたりに各地で文化財の防火訓練をしています。皆さんも今一度、周りの防火体制をチェックしてみてはいかがでしょうか。

七塚の手押し式ポンプ



「農具便利論」よりブランドスポイト
（国立国会図書館デジタルアーカイブより）

ブランドスポイトは、そもそも田畑の排水の道具。これを別の使い方として火事にも応用した。

手押し式ポンプには、「江戸」「浅草花川戸 龍吐水師 岡野庄三郎」とあり、「龍吐水」であること、江戸時代後期～近代初めに作られたことが分かる。